



Title	シンポジウム開催にあたって
Author(s)	宮崎, 隆志
Citation	子ども発達臨床研究, 6, 3-3
Issue Date	2014-12-05
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/57563">http://hdl.handle.net/2115/57563</a>
Type	bulletin (other)
File Information	AA12203623_06_3.pdf



[Instructions for use](#)

## シンポジウム開催にあたって

宮崎 隆志\*

子ども発達臨床研究センターでは、今日の教育や発達援助に関わる実践の危機を内在的に超えていくための新たな理論的枠組みの探究を続けています。その試みを暫定的に「発達支援学」と名づけていますが、その内実は依然として曖昧です。これまでは、その幻のような対象性を明確化するために、学内外の先端的な研究者・実践者の皆様のご協力を得て、2011年度には「遊ぶ・学ぶ・働く」と称したシンポジウムを開催し、翌12年度にはシンポジウム「生きづらさを超えて」を開催しました。

それらの内容は北海道大学図書館リポジトリ(HUSCUP)でご覧いただけますので、ぜひともご参照ください。この連続企画から浮かび上がってきたのは、様々な人々を締め出す社会システムの周辺に広がる非制度的・非定型的な空間は、「生きづらさ」に満ちているとともに、教育・福祉・労働・政治等の諸領域が交差する場でもあり、「生きづらさ」に向き合う教育実践には新たな質が要請されているということでした。

例えば、子ども・若者の「自立支援」に携わる多くの専門職・支援者は、何が自立なのか、実践において実現すべき価値は何かをめぐって深刻な葛藤を抱えています。その葛藤は、市場を志向する制度やそれに規定された評価制度によってもたらされているのみならず、実現すべき価値そのものをめぐる葛藤にも起因しているように思われます。自立支援実践の先行経験とも言える教育実践領域では、実現すべき価値として「発達」を位置づけて来ました。教育という介入行為が許容されるのは、普遍的な価値である発達を実現し保障するが故ですが、現代社会が生み出す「生きづらさ」の構造に目をやれば、人間的な発達を保障するはずの教育実践によって、逆に排除と「生きづらさ」が生み出されているという転倒性を視野に入れざるを得ず、「発達」概念そのものも再検討されねばならない局面に私たちは到達しているように思われます。

そこで、本シンポジウムはこの発達概念に焦点をあて、その現代的なインプリケーションを改めて検討してみることにしました。発達はもちろん、development ですが、それは日本語では発展とも開発とも訳されます。これから7人の報告者が development 概念をめぐって何が問題なのか、そして支援実践の文脈でその問題がどのように発現し、どのような対応が求められているのかについて、学際的な提起を行います。第I部では development 概念をめぐって生起している問題群を、精神発達・身体発達・国内外の周辺化された地域における地域社会発展という研究領域に即して、共通の問題群を描き出すことを試みます。第II部では、青年期・障害に直面する人々の支援を念頭に置きつつ、development 概念に含まれる問題性を実践場面に引き付けて検討します。皆さんにも議論に積極的にご参加いただき、この企画を通して発達支援学の課題や方法が浮かび上がってくることを期待しております。

---

\*北海道大学大学院教育学研究院・教授、副研究院長